都市環境委員会行政視察報告書

報告者名	委員長　　山本　秀明
視察日	①　令和５年５月１６日（火）～② 令和５年５月１７日（水）
視察場所	① 岐阜県関ケ原町 / ②三重県伊賀市
参加者	山本　秀明（委員長）、垰田　英伸（副委員長）、早乙女　実 森　久往、松本　利裕、遠藤　隆志、吉川　茂樹 （随行：事務局　辻　美幸）
視察項目	① 関ケ原古戦場を活かしたまちづくり、 関ケ原古戦場グランドデザインビルドについて ②可燃ごみ処理の民間委託とメタン発酵施設見学について

所　　感

① ５月１６日（火）　岐阜県関ケ原町

～関ケ原古戦場を活かしたまちづくり、
関ケ原古戦場グランドデザインビルドについて～

● 関ケ原町の概況

人口　　約６，３８４人
世帯数　約２，６７０世帯
面積　　約４９．２８ｋ㎡

● 視察内容

＜導入目的＞

東西を結ぶ交通の要衝であった関ケ原は、「関ケ原の戦い」の地として、多くの人に知られているが、以前は、観光として「人を呼んで・見て・楽しむ」ということができていないという課題があった。こうした中、岐阜県からの声掛けもあり、２０２０年の東海環状自動車道全線開通を視野に、関ケ原古戦場の整備と活用の指針となる「関ケ原古戦場グランドデザイン」を策定することとなった。学識経験者、観光関係者、歴史ファンなどで構成された、関ケ原古戦場グランドデザイン策定懇談会において、関ケ原のブランド力を活かした地域活性化と歴史資産の継承に向けた取組の基本的な考え方、並びに、それに基づく効果的なハード・ソフト両面での具体的な取組について取りまとめた。

＜具体的な事業や施設見学＞

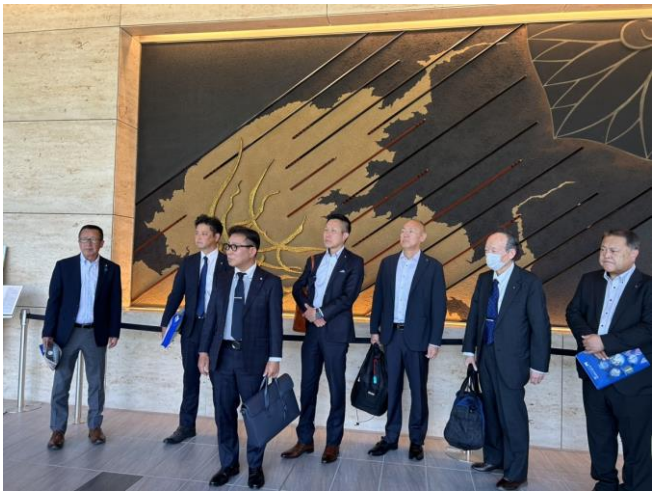
課題として、①「関ケ原の戦い」のブランド力の活用ができていない。②古戦場としての雰囲気やイメージづくりができていない。③古戦場史跡の歴史的価値の保全と活用されていない。④歴史の真実、その面白さやドラマを伝える工夫が欠けていた。

⑤一般の観光客が楽しめる環境整備の工夫が欠けている。という所が課題であった。

そのため、ターゲットとして、歴史ファンの方のリピーター拡大、旅行ファン、教育旅行のマーケット拡大を目標とし、『人と大地が織りなす「ものがたり」、関ケ原』をテーマにハード事業とソフト事業を展開してきた。

具体例として、ハード事業として、①岐阜関ケ原古戦場記念館として岐阜県が建設し県営しているが、関ケ原の戦いがどのような戦いかを一般の人にストーリーを伝える施設や、古戦場の観光の拠点として活用できる施設を整備した。物販、飲食施設も含めた商業棟、駐車場の整備も行った。②町の施設としては、関ケ原町歴史民俗学習館をリニューアルした。こちらは、教育的視点で学習できる学び語り合う施設として整備し運営している。③駅前の総合案内所でお土産の販売、レンタサイクル、コインロッカーの整備を行った。④いろいろな場所で PR できるよう映像コンテンツの作成を行った。⑤国の史跡とし登録されている(古戦場等１１ヶ所)ところを景観等整備した。⑥景観整備のため、無電柱化の整備。⑦案内・誘導サインを観光客にとってわかりやすいよう QR コード、多言語表記なども含め整備。⑧アクセス道路や駐車場など来場しやすい環境を整備。等を行った。

ソフト事業として、①お城フェスティバルなどに出店し PR を行った。②岡崎市などと連携し大河ドラマ館での出店も検討している。③パンフレットなどでのイベント等の案内を充実させた。④ウォーキングマップ・サイクリングマップの作成。⑤魅力向上のため、地域住民の協力を得て景観作物の作付でコスモス、フジバカナなどの花を植えた。⑥世界３大古戦場として PR、等を行った。



岐阜関ケ原古戦場記念館では関ケ原の戦いに至るまでの流れとその規模の大きさを伝える壮大な仕掛けが「グランド・ビジョン」として床一面に広がるスクリーンが設置され、その映像を見下ろすことで、東軍と西軍の配置や動きなど、リアルに観ることができました。さらに巨大スクリーンの「シアター 」では、迫力ある音楽と共に、風や振動、光と音の演出により再現された関ケ原の戦いを、まるでその場で見ているような臨場感での体感ができました。５階に上がると一望に見渡すガラス張りで各史跡を見渡せる展望室となっておりました。

＜導入による効果や今後の課題等＞

①ハード整備自体はほぼ完了し、流入客数は増加し、おしゃれなカフェができたり、県外からの移住者も出てきた。②史跡に対する入込客数の増加がみられる。③町民に対する事業に対する参加制度として、観光活性化支援事業補助金もあり、特産品、ご当地メニュー、土産物の開発観光誘客など、観光活性化につながる事業に対する１/２補助する制度も活用されているという効果が見られたとのことであった。

今後の課題としては、記念館や史跡を整備し、観光誘客は増えてきているが、地元商店での利用活用やソフト面での整備が今後の課題であるとのことであった。インバウンドに対する取り組みはこれから具体的に行っていく予定とのことであった。

● 今後の展望

本市には、池上曽根遺跡という歴史遺産があり、国による古代ロマン再生事業として整備された池上曽根史跡公園や、隣接地には、府立弥生文化博物館がハード整備されているものの、これらをいかしたまちづくりが行われているとはいいがたい。

本市の歴史資源は、関ケ原に比べ知名度やインパクトが弱く、人を呼び込む、観光産業につなげていくには、厳しさも感じるが、国や府と連携し、情報発信や街のイメージづくりにつなげる取組が可能であると感じた。今回、関ケ原町職員の方から色々と教わりました。今後、関ケ原町の取り組みを参考にしてまいりたいと思います。ありがとうございました。

② ５月１７日（水）三重県伊賀市

～可燃ごみ処理の民間委託とメタン発酵施設見学について～

● 伊賀市の概況

人口　　約８６，４１８人
世帯数　約４０，３３６世帯
面積　　約５５８．２３ｋ㎡

● 視察内容

＜委託した経緯＞

さくらリサイクルセンターは、平成１４年１１月から可燃ごみを固形燃料化（ＲＤＦ化）し、発電燃料として三重県企業庁の発電施設に運搬する事業を実施。発電事業

は、令和３年３月で終了する見込みとなり、その後のごみ処理方法について検討を行う必要が生じた。平成２５年に検討委員会を設置し、検討を実施。施設整備やごみ処理コスト等を考慮し、伊賀市単独ではなく、近隣市町村と広域的な施設建設を進めることが望ましいとされ、それまでの移行期間については、民間により処理をする方針となり、民間委託を行うにあたり、中継施設が必要となった。三重県の発電施設の終了時期が前倒しされ、中継施設への改修工事も前倒しで実施し、改修工事を受注、可燃ごみの運搬・処理業務を委託契約した。

＜委託業務内容＞

◎可燃ごみ中継施設運転維持管理業務

・ごみ受け入れ対応

・積み替え作業

・ごみクレーンの運転等

・排水処理施設の管理

◎可燃性ごみの処理業務

・可燃ごみの運搬処理業務

・硬質プラスチック、革製品類の処理業務

・硬質プラスチック、革製品類の運搬処理業務

一日の処理量はおおむね総量６０から７０トン

＜委託による効果や今後の課題等＞

委託したことにより、処理施設の管理（保守・修繕等）に係る業務の改善や処理経費の削減ができた。

しかし、施設が稼働２０年経過し、老朽化が進行。突然の故障の発生頻度が多くなってきている。修繕発注手続きの事務が増え、また、半導体不足等で必要な部材の納入に時間を要し、修繕期間が長期化していることが苦慮であるとのことであった。対応としては、各機械設備の耐用年数を把握し、計画的に部品交換等の補修対応を行くとのことであった。

＜施設見学＞

施設見学ではさくらリサイクルセンターと伊賀リサイクルセンターを見学。伊賀リサイクルセンターでは、持続可能な社会の構築と脱炭素化の実現に向け、再生可能エネルギー供給事業の推進に積極的に取り組むメタン発酵について、メタン発酵（バイオガス）の堆肥化施設と、４つのラインで効率的に破袋、分別、破砕、溶解等の前処理を行う破砕・破袋・分別施設を見学しました。

● 今後の展望

本市のごみ処理は、和泉市、泉大津市、高石市の三市が一部事務組合を組織し、泉北環境整備施設組合で行われている。現在の炉の更新について協議が行われており、建設場所について様々な意見があるようである。今後の人口減少など様々な要因を考えると全てのごみ処理を公設公営で行う方法以外に選択肢がないのかを調査するため、ごみ処理を民営化している伊賀市のさくらリサイクルセンター及び、民間の伊賀リサイクルセンターを視察した。今回の視察でお聞きしたことを基に、本市でのごみ処理の民営化の実現可能性や、公設の場合のコスト比較など、泉北環境整備施設組合での新炉の更新がどの規模で必要かを考える参考にしていきたい。今回、伊賀市職員並びに施設の皆さまに大変お世話になりました。ありがとうございました。